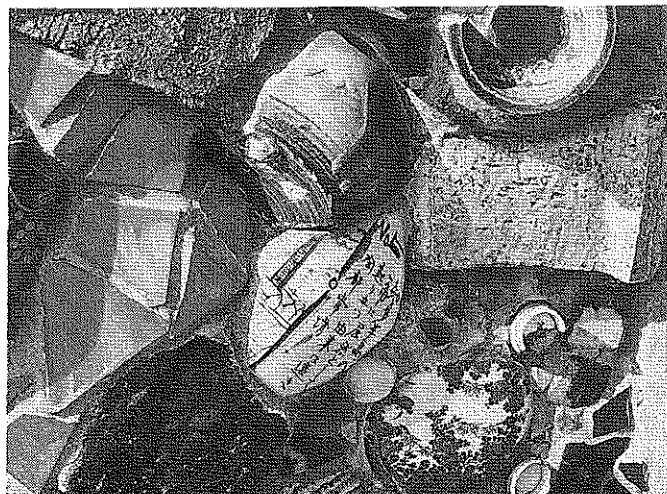


よか ネット

YOKANET

NO. 11 1994. 9

(株)九州地域計画研究所



二十六聖人の像の裏手にある記念館に聳えたつ双塔の壁などに散りばめられた茶碗は、聖人達が塚から長崎までの28日間の道程で立寄った各地の陶器が集められたもの、写真中央には知多半島のものも見える
(本文13頁)

も く じ

〈NETWORK・ネットワーク〉

2. やぶにらみ九州論6 ―長崎・400年の軌跡と将来―
6. 地方シンクタンクフォーラム「人生80年時代のライフスタイルと地域社会」

〈見・聞・食〉

8. 露天風呂を見に行った
10. 日曜日の朝は早起きをして刺身を 志摩町初地区の朝市
12. ある建築家の遺した作品と引き継いだ人々～「石匠館」と「弧風院ゼミナール」
13. 聖人達の約束の地～二十六聖人記念館のフェニックス・モザイク～

14. 食場日誌

〈近 況〉

15. 中国の経済開発区を見に行った
15. 所内勉強会～地方財政の仕組みについて
16. 地域ゼミ～宗像ユリックスについて
17. 筑後川の源流を訪ねて
17. 24年ぶりの東京

〈本・BOOKS〉

19. 「フィランソロピーの社会経済学」 本間正明 編著

文化・学術・貿易型都市 → 重厚長大型都市 → ?

— 長崎・400年の軌跡と将来 —

長崎のことを勉強する機会があり、そのなりたちから明治以降、あるいは敗戦後の復活を通して見ながら、つくづく九州全体の典型ではないかと考えた。長崎は①16世紀以来西欧近代文明の窓口であり、②明治以降は軍事拠点と軍事産業として、③戦後は重厚長大産業を通して日本経済復興の先導役として推移してきた。④しかし現在では人口減少率の最も高い県となっており、重厚長大産業の時代からの転換に苦しんでいる。これを抜け出す方向は何なのかについて、少し考えてみたい。

(2,000人から60,000人へ)

長崎が開港された頃の人口は約2,000人ぐらいだったとされている。これは当然で、開港前は単なる漁村だったと思われるので、町の人口はなかったのかもしれない。ポルトガル船が、はじめて長崎へ入港したのが1571年で、その8年後の約2,000人という人口は、貿易に対応して急ぎ集まってきた人々だろう。

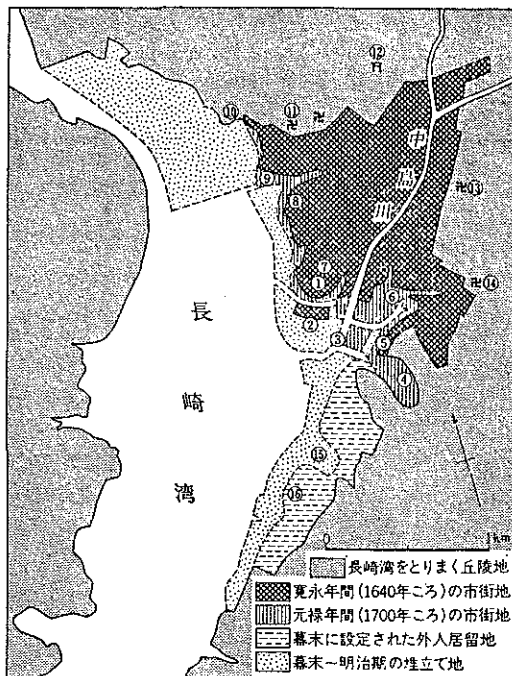
1600年頃の日本の総人口は1,500万人程度とみられ、それが2倍になるのに300年(幕末まで)かかっているのであるが、長崎は急速に人口を伸ばしている。35年後の1615年に約25,000人となり10倍以上の伸びである。

都市基盤整備に着手するのも早く、1667年には給水工事にとりかかっている。80町の市街が形成された段階で約4万人となっている。この80町は出島一崇福寺一諏訪神社一長崎駅あたりを結ぶ約100ヘクタール(1キロ四方)の地域である(図1「江戸時代

末期の長崎」参照)。

(本当は10~20万の過密大都市だった?)

学問的ではないとお叱りを受けるかもしれないが、一寸想像力を働かせてみたい。表1は人口の動きにかかわるものを抜粋した年表であるが、人口と戸数の



- ①長崎奉行所(現在県庁) ②出島 ③新地唐人荷物蔵 ④唐人屋敷
 ⑤本誓町 ⑥浜町 ⑦長崎初期の内町6町の場所 ⑧五島町
 ⑨大黒町 ⑩西坂 ⑪福濟寺 ⑫諏訪神社 ⑬興福寺 ⑭崇福寺
 ⑮大浦入のち大浦町 ⑯南山手町

図1 江戸時代末期の長崎

(日本地誌より)

関係に不自然なところが多い。10,160戸で52,702人だったり、11,257戸で64,523人、12,203戸で31,893人、10,581戸で27,166人などと、戸当たり人口が5.7人から2.6人のバラツキがある。そのバラツキの原因は人口の方であって、戸数の方は大体安定している。

ここからは全くの想像なのだが、一般に戸口（戸数と人口）というが、これは普通人として届け出られたものではなかったのかと思う。つまり、ここに出てくる人口には、雇用者や婦女子、あるいは人夫など（特定の戸に属さないものなど）は入っていない場合もありうる。戸当たり人口が最も多い5.7人としても、あまりにも少なすぎる。現代のような核家族であるはずもなく、一家の中には、貿易都市を構成していくための番頭、手代、丁稚など、商家のメンバーが必要であり、商家の場合は、一般的には20人以上ぐらいと見られる。また、“こぼれもの”で暮らしていた船荷役や、陸側の各種人夫も加えると、戸当たり10人=10万人でも少なく、20万人程度の大都市だったのではないかと想像する。

人口密度を考えてみると、表にのっている6万人だとすれば600人/haであり、住宅過疎になる以前の日本の大都市の中心部では、1,000人/haでもめずらしくない数字である。郊外の住宅団地などは、一般に100人/haぐらいであるから、一応相当過密ではある。ところで2,000人/haとなるとどうかというと、上海の中心部の人口密度を尋ねたとき「2,000人/ha余」と聞いたことがあり、これも不思議ではないと思う。以上は私の推理物語である。

〈盈物（こぼれもの）がもたらしたもの〉

こぼれ物というのは、荷役の際にこぼれ落ちたもののことである。これを雇い人夫たちが拾い集めて

表1 長崎の人口の推移

1579	約 2,000	
1590	約 5,000	
1611	約15,000	
1615	約25,000	
1641		・長崎の市街は内町25町、外町49町 (計74町)
1659	約40,700	
1667		・市内の給水工事着工(1673年完成)
1672	40,025	・市街を77町(丸山、寄合、出島を合わせて80町)
1681	52,702	・市街80町、戸数10,160、寺40、社10、 造酒家160戸、丸山の遊女屋74軒 (遊女数776人)
1696	64,523	・11,257戸
1708		・地役人1,702人
1771		・戸数10,143
1790	30,893	・戸数12,203
1833	40,019	・市街地256,064坪(3.3㎡/坪とすると 84.5ha、3.8㎡/坪とすると97.3ha)、 この頃の長崎は80町だったので、お およそ1町=1haとみて良いが
1838	27,166	・地役人など2,069人 ・市街戸数10,581

出典：「長崎町人誌」より抜粋

売買して収入としたもので、一種の権利とみなされていた。砂糖など弁当入れに拾い集めれば、家族1日分の米と同じぐらいになったといわれている。

しかし、ここで私が言いたいのは、もっと広い意味の“こぼれもの”についてである。貿易に付随してこぼれたもので、最も日本に大きい影響を与えたのは西欧文明である。洋学の窓口になった長崎は、ポルトガル語、スペイン語、オランダ語のみでなく、英語や露語の中心にもなっている。語学以外にも天文・地理、物理・化学、医学はいうまでもないが、さらには本草学（薬用に重点を置いて、植物等を研究した中国古来の学問）の中心ともなり、それが蘭学と

結びついて博物学となっていった。

ここまで書いてきて司馬遼太郎の「ポンベの神社」というエッセイを思い出した。ポンベはオランダの海軍軍医であるが、これも長崎で開講している。神社というのは、山口県三田尻の人がポンベ先生の人柄と学問を尊敬して、庭に一詞をたてて朝夕拝んだという話である（興味のある方は「この国のかたち」を参照されたい）。

貿易というものは、大変な“こぼれもの”をもたらすものである。これ以外にも、長崎街道沿いの菓子産業も、長崎ルートがこぼしたものである。つまり広く文化にも及んでいる。

〈知的装備都市から重厚長大都市へ〉

明治以降の長崎は、それまでの日本を先導する役割から後押しする役割に転換していった。それが軍港化、軍需産業基地化であった。つまり知的部門は中央にとられて、ハード部門として生きることになってしまった。しかし表面的には、江戸時代より好景気となり、人口も再び急増することとなった。

このことは、敗戦後も続いている。一時的に低下した景気も“造船ブーム”で活況を呈し、大幅に人口が増えた。

しかし現在は、日本全体の産業構造も含めて、重厚長大からの脱皮が急がれており、ソフト化・サービス化へ進んでいる。長崎はハード都市としての景

気が好かったためにそれへの転換が遅れているように見える。それを示しているのが表2である。これは事業所統計を組みかえたものであるので、事業所に入らない農林漁業は含まれていないが、それにしても長崎県の知的部門を含む地域づくり先導型産業の従業者は少ない。また重厚長大型を含む地域基幹型分野でも全国平均より大幅に少なくなっている。

九州全体が、明治以前は日本の知的先進地であったが、明治維新以後は重厚長大にシフトし、戦後も同じ道を歩んだ。表でわかるように、九州全県の先導部門が弱いということになっている。

〈長崎・九州の新しいみちは？〉

もう少し長崎の歩みを、地図の上で辿ってみる。図



図2-1 長崎の変遷（明治34年）
出島周辺にまちができていた

表2 人口千人当たりの部門別産業従事者数

	全国	長崎県	福岡県	熊本県	大分県	鹿児島県
全産業	485.6	383.3	457.0	406.3	422.7	393.5
①地域づくり先導型	103.2	82.7	96.6	84.8	89.6	80.7
②地域基幹型	233.3	157.8	200.8	172.6	179.3	166.5
③地域サポート型	149.0	143.0	159.5	149.0	153.8	146.3

資料：「事業所統計調査」

単位：人

2に3枚の地図を引用するが、図2-1 (M34年)は江戸時代末期の長崎と大差はない。長崎奉行所(現県庁)や出島や唐人屋敷などを核にしたソフト機能中心の形を残している。それに加わったのが浦上まで来た鉄道と対岸の三菱造船所である。大正になると図2-2、(T13年)、鉄道は現長崎駅まで伸び、三菱も拡大し、さらに紡績工場なども立地しはじめ、重厚長大へ向って変化しつつあることがわかる。図2-3は重厚長大最盛期(S45年)の地図であるが、江戸時代の長崎は一部を形成するにすぎなくなっている。もちろんこのような人口増加が、最大の好況をもたらしたことはすでに述べた通りである。そして現在はその転換が急がれている。

新しい方向を考えるためのヒントとして長崎の観光産業がある。長崎市の観光客の年間消費額は約700億円とされている(市観光統計)。一方製造業の付加価値額は約1,000億円である。観光などというものが地域産業となったのは高度成長期以降のことであり、たかだか30年程度の歴史であるに於ては100余年の製造業と匹敵するとは立派なものである(消費額と付加価値を同一視しているわけではないことを少し説明する。観光業は付加価値率50%以上で、ほとんど全部地域内波及し、域内生産誘発効果も2.0ぐらいになるものとすれば、付加価値も700億円ぐらいになるとみられる)。

この観光収入は、文化・学術先端地域であった頃

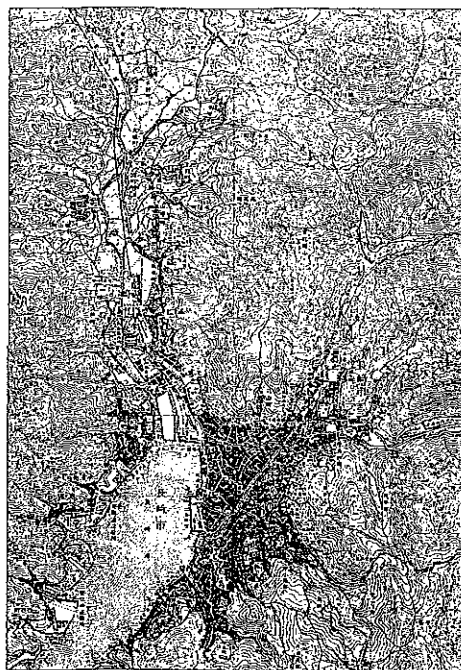


図2-2 長崎の変遷(大正13年)
浦上に鉄道が入った

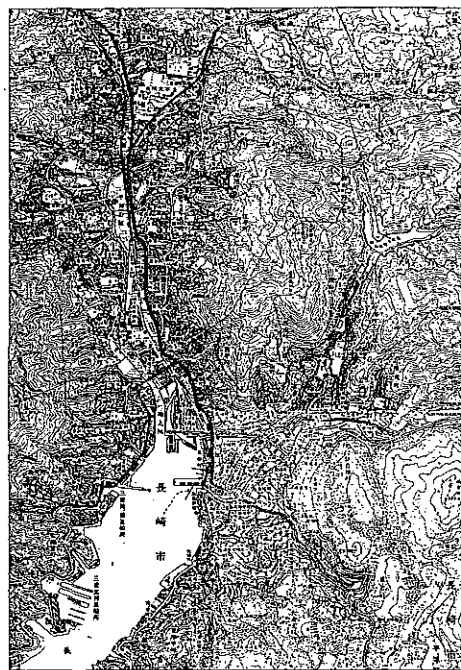


図2-3 長崎の変遷(昭和45年)
出島から浦上へまちが広がった

の遺産がもたらしたものであり、観光客は古い坂の街をせっせと歩いてくれている。

新しい方向は言うまでもなく、ソフト化・サービス化である。しかし江戸時代の長崎が受け持ったような条件はすでにないのであるから、日本の先端学術地域化ということは無理なように思う。不思議なことに、ソフト化・サービス化路線の都市であった頃は、長崎は坂を生かした街であった。ハード路線の頃は平地を求めてどんどん周辺に拡がっていった。新しい時代のソフト化・サービス化も坂を生かす街づくりのような気がする。坂の街に老人も住みやすいように、市道・県道として、道路という考え方で小型斜行電車を縦横にめぐらす。観光客も喜ぶし、おそらく道路を建設するより安く上がるのではないかと思う。

長崎は高齢者率が高い。高齢福祉産業（旅行、遊び、文化などのソフト産業も福祉機器づくりなどのハード産業も含めて）に対する実験地にもって来いの土地柄である。

九州は気候温暖であり、日本の他地域と比べると福祉産業に有効な土地柄である。そして農漁業が福祉や観光などの核になる。重厚長大から幅広いソフト路線への転換が望まれる。

もうひとつ加えると、長崎や九州が、あるいは東京を除く日本のすべてが、量的拡大＝首都圏と同じ拡大路線を指向しているかぎり東京への一局集中は止まらない。首都圏集中で対応しきれないもの、地域の独自性を生かしたものを長崎や九州、あるいは日本の地方が指向すれば、東京にとっても好ましい日本ができる。そしてそれが、今後の日本の歩むべき方向であり、地元にとってもバランスをとりもどすための早道である。 (糸乗 貞喜)

地方シンクタンクフォーラム

「人生80年時代の

ライフスタイルと地域社会」

■地方シンクタンクフォーラム

総合研究開発機構（NIRA）では、毎年、地域社会の活性化に関する特定の研究課題を設定し、この課題のもとに研究を行う地方シンクタンク協議会の研究機関に対して助成が行われています。「人生80年時代のライフスタイルと地域社会」が今年度の課題で、6月23日（木）、仙台国際センターでこの研究報告会、地方シンクタンクフォーラムが開催されました。

まず基調講演として、東北学院大学教養学部教授、遠藤恵子先生が「これからの社会と生活設計」と題して以下のような話をされました。

「人生は今や80年、あるいはそれ以上になってきている。このライフスタイルの変化に伴って、社会も変化し、経済的には、モノ作りからチャンス作りへと、そして政治的には、その課題が生活水準の向上から生活満足の追求へと移行している。また、個人レベルでも、物材の満足から関係材（友人関係・近隣関係）の充足へと求めるものが変わってきている。」

この基調講演の後、実際に研究を行った35機関の方々がその成果を発表されました。「人生80年時代のライフスタイルと地域社会」というテーマのもとに、地域社会のありかたについて、実に様々な報告や提言がされましたが、その中から特に印象に残ったものを挙げます。

・新しいライフスタイルを支援する環境、地域づくり… 人生80年時代になり、個人生活のあり方が、生産を追求することから、自分らしく生きること

に変わってきている。そのため、生産の場としての社会との関わりだけでなく地域社会とのつながりを持つことが大切になってくる。地域社会もこの変化に対応し、受け入れる体制（Iターンの受け入れ、生涯学習の場の提供、ボランティア活動支援等）を整えることが必要になってくる。

- ・高齢化、過疎化する社会を支える地域づくり… 人生80年時代はそのまま高齢者社会を意味し、高齢者がますます増える今後は、福祉施設の整備等とともに就労を含めた社会参加の場を充実させることが地域社会に求められている。また、農村、山村等では、若者の都市への流出が進み、高齢化とともに過疎化を招いている。これらの地域の活性化をはかることも、これからの地域づくりの要素である。これらの発表を聞き、具体的な提言を聞いて、ライフスタイルの変化に社会の方がまだ追いついていないという現状が感じられました。個人の多様なライフスタイルに対応していくには、問題も多いと思われませんが、それぞれの地域の特性を活かしながら、地元ならではの方策がとられるよう、提言していくことが大切だと思いました。（富重 慶子）

■エクスカーショ

国際交流でまちづくり七ヶ浜国際村

翌日24日（金）に行われたエクスカーションで見学した七ヶ浜国際村について報告します。

〈七ヶ浜町と国際交流〉

宮城県七ヶ浜町は、仙台市から車で約50分、町全体が県立自然公園松島の中にあります。面積13.27km²で県内最小、人口も2万人弱（H2）の町です。

明治21年、この町に狩りに来たアメリカ人大学教授がこの地を気に入り、同僚の外国人教授たちと避



七ヶ浜国際村

暑に訪れるようになりました。翌年、町は高山という所を別荘用地として外国人に貸し付け、「高山外国人避暑地」として、最盛期には300人以上の外国人がパカンスを過ごしに訪れていたそうです。現在でも約50軒の外国人住宅があり、夏祭りなどで地元の人たちと交流が続けられています。

この歴史的な背景に基づき、平成5年に、総事業費36億円をかけて、ホール、研修施設等を備えた「七ヶ浜国際村」がオープンしました。

〈施設利用の7割は地元町民〉

メインである国際村ホールは、577席収容可能で、ロビーを縄文色、ホールをマリブルーで統一してあります。舞台正面は一面ガラス張りとなっており、町の自慢である海のある景観が見渡せるようになっています。このホールでは、人気のある劇団や音楽家のコンサートが行われ、仙台市や東京からもファンが観にきているそうです。

研修施設の中には、キッチンと食器が備わったセミナー室やギャラリー、レストラン、姉妹都市のプリマ市の展示館等があり、全体利用客の7割は地元町民だということで、町民の自慢、シンボリック施設になっているようでした。

〈町民参加型事業〉

事業の内容では、ただ公演を行うだけではなく、ミュージカルの合唱団として参加したり、町民参加型事業としての工夫もされているようです。

また、ワークショップと題して、地元の特産品である海苔をテーマに、日本人と外国人の混合グループで体験学習を行ったり、七ヶ浜町を再発見しながら国際交流をするという事業が行われています。

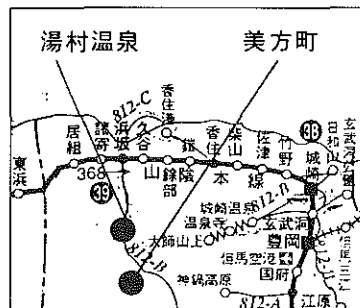
ここでは、何よりも「町を良くするために、まずは町の良いところ探しをやった」、「施設をつくるなら、良いものをつくりたかった」という、町の職員の方の施設に対する意気込み、まちづくりに対する熱意を感じました。先日、当社で行われた地域ゼミ「宗像ユリックスは地域のシンボルを超えたか」での小田さんのお話の中に、「施設が良いものになるかどうかは、職員のやる気如何にある」という言葉があり、七ヶ浜国際村のことが頭に浮かびました。

(歌丸 星子)

露天風呂を見に行った

去る7月始めに、関西の「ため池の会」というグループの視察旅行に同行させていただき、兵庫県は但馬の国に位置する温泉町、美方町にある露天風呂を体験しました。両町の露天風呂の計画については、当初のまちづくりの段階から当社所長糸乗が関わり、運営も頑張っているとのことで前々から一度訪ねてみたいと思っていたところでした。そこで、2泊3日の視察旅行ではありましたが、露天風呂をはじめ旅先で感じたことなどをご紹介します。

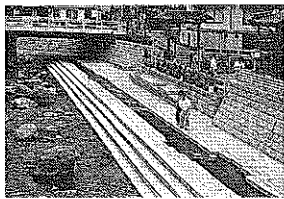
〈夢千代日記の続編は難しくなかったか〉



湯村温泉といえば、ひと昔前NHKで放送された「夢千代日記」の舞台となり、一躍脚光を浴びたところであり、裏日本の鄙びた温泉地と吉永小百合が演じた「夢千代」のイメージが重なり、私にとってまさに憧れの地のひとつであった。

姫路駅から播但線に乗換え、浜坂駅からさらにバスに揺られて約7時間を要してたどり着いた湯村温泉は、私が想像していた温泉地のイメージより多くの大規模な宿が林立しており、温泉地の中央を流れている川の片側には遊歩道が整備され、河川沿いの道には小綺麗な鉄製の欄干が取り付けられていた。町並みはハイカラになっていて、私が当時テレビで見っていた風景とは少し異なっていた。

当地では、糸乗が当時まちづくりの計画を手伝っていた時の企画課長でいらした倉田さんという方が、夜わざわざ宿まで訪ねてきて下さり、色々な懐かしいお話を聞かせて下さった。この方は当時「夢千代日記」のロケの時に長期にわたってロケ班に随行し、ロケのお世話されたということで、現在でも脚本家の早坂堯氏や、当時のNHKの演出家である深町幸雄氏と親交を温めておられる。数年前この深町氏が当地を訪れ、河川敷を見て次のように語ったということは私の第一印象と、奇しくも同じであった。「なん



上：ハイカラになってしま
った河川敷
右：平和を祈ってつくられ
た夢千代像



てことだ。町が綺麗になりすぎて、夢千代日記は撮れないなあ。」と…

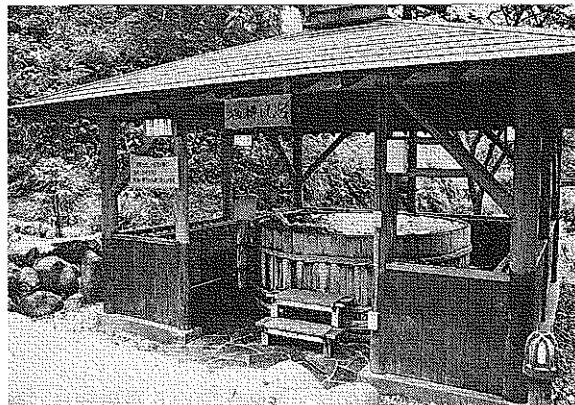
〈13分の町から滞在型の町づくりをめざした露天風呂建設—リフレッシュパークゆ・む・ら〉

「糸桑さんがこの町の印象を語った時に、『この町は13分の町で、あとすることがない町ですね』といったことが、まちづくりの発憤のきっかけとなり、この事業に頑張って取り組むこととなりました。」「13分」とは湯村温泉の98℃という高温の温泉で卵をゆでる時間であり、温泉はあるけれども当時は遊ぶ要素の少ないところであったという町の状況を端的に表現していて面白い。

これは、「リフレッシュパークゆ・む・ら」の企画・事業・運営まで係わった中村氏が、この事業の概要を説明される冒頭に話された内容であった。

このリフレッシュパークゆ・む・らは昭和61～62年にかけて建設されたものであり、町民プール、老人福祉センター（屋内の健康温泉スタイルの施設、休憩コーナー）、露天風呂、総合案内施設（ビーフレストラン、工芸アトリエ）、森林公園（森林浴散策道、芝生広場等）を組み合わせた複合施設である。

また、事業費としては厚生省、文部省、農林水産

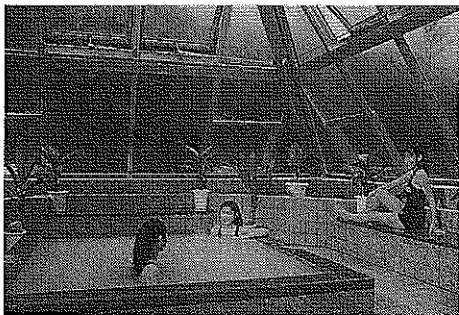


但馬で使われていた酒樽の風呂

省の各補助事業を組み合わせたものであり、名目は町民利用となっているが、今では本町の観光施設の核として町民をはじめ広く湯村温泉を訪れる人々の憩いの場となっている。この中でも露天風呂は当施設の目玉であり、水着（レンタル）を着用して男女混浴可能となっており、傾斜地を利用した敷地には滝風呂、蒸気風呂、酒樽風呂、四季風呂の4つの露天風呂が配置されている。狭い敷地にもかかわらず、裸で天空を仰いで風呂に入るといった行為は何故か開放的な気分させてくれる。

当施設の利用者は昭和63年の開設当方で10万人であったのが、平成5年には約14万人と毎年7～8千人増と着実に伸びているとのことであった。

また、第3セクターである株式会社「温泉町夢公社」が運営にあっているが、町からの寄金はなく全く自前で運営しているということは、この種の施設では希なことではないかと思った。あと3年ぐらいで起債の返済を完了し、4年目からは今までの返済分は利益になるということであった。とにかく各種補助金を組



星も見えるガラスピラミッド風呂

み合わせ、独立採算体制で運営している当施設は、補助金行政の立場からすれば目的外使用の面もみられるが、町の活性化には大いに役だっているのである。
 〈町民人口の約30倍が訪れている“温泉保養館おじろん”〉

温泉町からさらに山手の方に入り込んだ行き止まりの町・美方町にこの「おじろん」が建設されている。当町のまちづくりは過疎との戦いの歴史であり、平成2年国勢調査では人口2,872人と、3,000人を若干下回っている。昭和50年以降にふるさと町民拡大という現在自治省が言っているような交流人口の拡大を目指し、ふるさと宅配便事業、山のない大阪府の町・忠岡町のふるさと施設「ミカタヒルズ忠岡」の誘致、小代物産館の建設など各種事業に取り組んでいる。当「おじろん」も町の活性化事業のひとつとして「ふるさと創生事業」の1億円で温泉掘削を行い、自治省の起債事業を事業費にあて、平成4年11月にオープンしているものである。現在、年間約10万人が利用しているとのことであり、町民人口に対して約30倍の入り込み客である。対人口比という点のみで比較すると、例えばハウステンボスは佐世保市人口の約16倍であり、当施設はハウステンボスより上

回っているのである。

当施設の特徴は、冬でも露天風呂で星が見られるようにということでガラスピラミッド3体が、丘陵地の緑の中に聳えている。このガラスピラミッドの中には乳白風呂、ワイン風呂、生薬風呂などの薬湯があり、高台の一部には露天風呂が配置されており、周辺の緑を眺めながらの温泉保養は快適である。

但し、このガラスピラミッドの中の浴槽が直径2m程度と少し狭いため、先に女性が入っているといかにお互い水着を着用しているとはいっても気恥かしく遠慮してしまう。水着着用といってもやはり男女混浴可能な露天風呂の規模としては最低でも10~12畳は欲しいものと思った。（山田 龍雄）

日曜日の朝は早起きをして刺身を

志摩町初地区の朝市

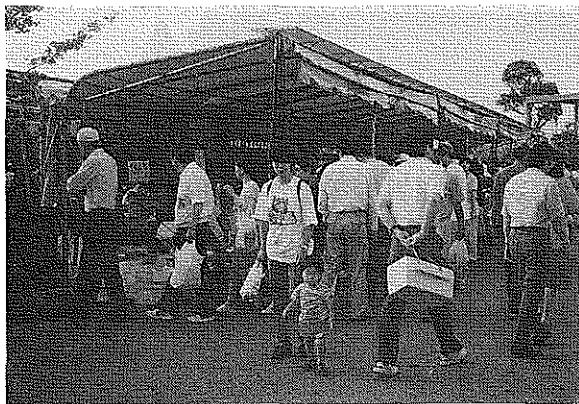
〈日曜日の早朝に車は西に向かう〉

日曜日の朝4時30分の福岡都市高速を走る車は、どれも西へ西へと向かう。これらの車は大抵、朝市狙いの「食い物好き」が運転している。

私が福岡市近郊の港町における朝市の話聞いたのは2年ほど前のこと。福岡市西区姪浜や志摩町などで、地元の漁師さんを中心に日曜日毎に朝市が開かれており、野菜や魚介類が信じられない安さと新鮮さで手に入るとい話を親戚から聞いていたのである。そこで、私も「うまくて安い魚」を食いたい一心で、4時起きで買い出しに参加してみた。

〈ジャンプで挑発してくれるカワハギ〉

行ったのは、福岡市都心から西部15kmに位置する志摩町の初というところ。5時前につくと既に黒山の



5:30頃、手にクーラーを下げて満足げな人も

人ばかりである。既に市の準備は出来ており、地元の漁師さんが並べた魚がそこかしこでピチピチ跳ねている。買い物客は気に入った魚の前で、販売開始(5時)を待ち切れない様子。とりわけ、私の視線を釘付けにしたのは、山積みになって派手に跳ねているカワハギ。挑発しているようにも見えた。30cm位のが3匹で500円という安さ。天然もののマダイ(50匹位)があまりに激しく跳ねて、鱗が目に入り往生しているご婦人や、イカにスミをかけられて片足が真っ黒になっている旦那もいた。

〈関係者が団結した地道なソフト面の活動が成果に〉

志摩町役場の農政課の方にこの朝市についてのお話をいろいろ聞いてみた。現在は日曜日毎に修羅場を迎えるこの朝市も、スタートは順調ではなかったようである。

志摩町では、自然休養村整備事業(1975年)による町内5ヶ所の観光農園はハード面の整備は行ったものの経営状態が行き詰まり、これに補完して導入された「緑の村整備事業」(1979年)でも年2回の青空市が行われた程度であった。しかし、地元の農園組

合や農漁協婦人部の地道な活動により「新鮮で、安心できる農海産物」を産出する口コミ情報が福岡市など町外で広がっていった。もともと、福岡市に新鮮な魚介類や野菜を供給している地区である。

これを受けて、町内でも観光農業推進会議(農、漁、商業、行政)を発足(1986年)、青空市の定期開催化決定や福岡市での広報活動など、従来の「待つ観光農業」から「攻めの観光農業」へと脱皮する展開を図る。その後、朝市の毎週定例化へと移行していった。

現在、年間約12万人の入込み客数(1日当たり1,000~3,000人)があり、日曜日のわずか3~4時間のみの勝負としては立派な数字である。推進会議は経営状態の好況から、1988年以降は町の補助を受けずに自主運営を行っている。平成4年2月には朝市会が朝日農業賞を受けた。

この成功には、幾つかの要素があり、①ハード基盤のみで失敗したことで、広報活動などソフト面活動に着目し結果的に成功したこと、②当初より大都市・福岡市及び周辺市町村をターゲットに展開したこと、「目標は大きく」である、③地元の農漁業団体がメインとなって活動することに町が積極的に支援したこと、などが挙げられる。

〈朝市の醍醐味~日曜日の朝飯に車海老のオドリ〉

販売開始の合図と共に修羅場が始まった。買い物客は我先にと血眼を挙げて目標物を買求めに走り、市を仕切るおばちゃん達(全員地元の人)の忙しさもピークに達した。私も目標物を早々に手に入れ、辺りを眺めていた。時々袋の中で暴れるカワハギが鱗でピタピタ私の足を叩いてかわいい。

見ていると生け簀トラック(正式名称がよく分からない)が次々と到着し、魚が入荷されてくる。漁師さん達の顔つきがまたいいこと。うまいものを皆

に分けることへの気概のようなものを感じた。

ちなみに、私はその日、姪浜の朝市にもハシゴして車海老を格安で手に入れ、家に急ぎ戻り、日曜日の朝飯を車海老のオドリ、カワハギの肝のタタキで優雅に過ごした。曰く、早起きは三文（胃袋・お金・メンタル）の徳。（尾崎 正利）

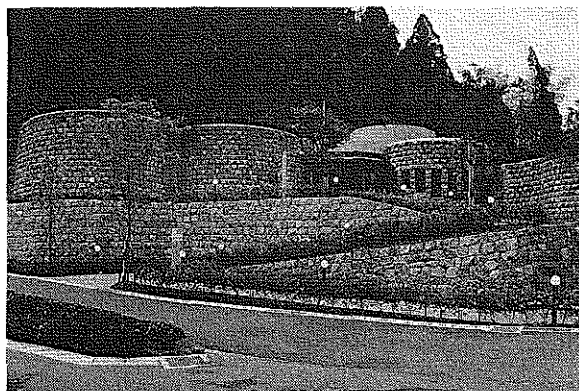
ある建築家の遺した作品と引き継いだ人々
～「石匠館」と「孤風院ゼミナール」

昨年の「よかネット No5 (9月発行)」でも紹介したが、元熊本大学工学部教授の建築家、故木島安史氏の遺志を継いだ「孤風院の会」主催による「孤風院ゼミナール」が7月23日（土）に開かれた。それに先立ち、木島氏の遺作3部作といわれる内のひとつ、石工の里歴史資料館「石匠館」がこのほど竣工し、その見学会が行われた。

〈小さくても重量感十分の「東陽村石匠館」〉

石匠館は熊本市と八代市の中間に位置する東陽村にある。東陽村は江戸時代「種山石工」という集団を生み、彼らは熊本県矢部村の通潤橋や皇居の旧二重橋をはじめとする数々のアーチ橋を手掛け、全国的にも有名になった。今も村内に数多く残る石橋と、その技術のシンボルの資料館として計画されたのが「石工の里歴史資料館 東陽村石匠館」である。

現地集合に合わせ案内状の地図を見て行こうとしたが、地図があまり正確でなかったため少し迷った。勘を頼りに行こうとすると川を挟んだ小高い丘の斜面に、グレーの、ごつごつした表面の、もこもことカーブを描いた壁面が見えた。一見そのどっしりした円柱形が、何かの処理施設にも見えるところが少



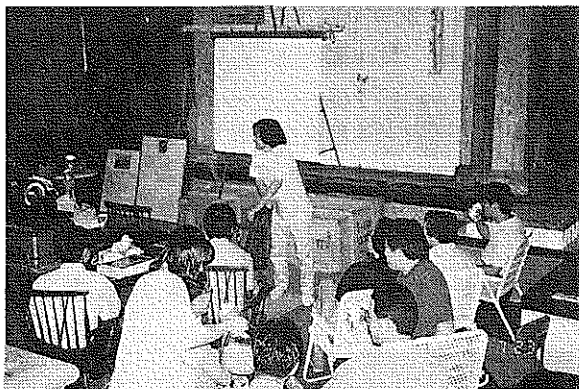
森と空に囲まれた東陽村石匠館全景

し損な感じもするが、石積みの自然な感じが森と空に囲まれて、割合美しい姿をしていた。壁面の石積みには、1個約400kgの石が11,000個使われて重量感があり、竣工したばかりだが既に貫禄十分に見えた。

石匠館は思ったより規模は小さくなく、こじんまりとした感じの施設だが、中には石橋造りの基礎となる支保工の実物大の模型をはじめ、パネル展示や立体アニメーションによる石橋の紹介からアーチを作ってみる体験コーナーまで様々な見せ場が用意されていた。また展示室を見上げると、丸太を三つ巴に組んだ工法でドームを造っており（平べったくてドームには見えにくい）、不思議な気分させてくれた。〈手作り未完成の「孤風院」と「ゼミナール」〉

石匠館見学会の後、阿蘇山の麓にある孤風院へ向かった。孤風院とは旧熊本工業高等学校の講堂を移築し、木島氏が自邸としていた建築物の名称である。

ゼミナールを前に、まずは屋外にてバーベキューで交流会。そして日が沈む頃を見計らって、元講堂となる孤風院の広間でゼミナールが開かれた。今回の講師には雑誌「新建築」元編集長の中谷正人氏が



独特の空間で行なわれたゼミナル

招かれていた。

ゼミはまず参加者に石匠館や孤風院の感想などを聞いた後、中谷氏の雑誌編集者としての立場からからみた建築についての話がなされた。途中モダニズム建築等のスライドを見せるひとときがあったが、その映し出されるスクリーンは、大きな木箱の上に脚立をのせ、それに渡した角材に白幕をたらすという現場工事なみの設備だった。しかしそれはベニヤ張りの残る内装にマッチしており、手作りで未完成の孤風院とゼミを象徴していた。

ゼミで話された、あるいは議論された内容を一部紹介する。

- ・雑誌を作る側が掲載する作品を選ぶ基準は、その建築から何らかのメッセージが伝わってくるかどうか。表現するということは、多くの人に伝えるということ。
- ・木島氏の言葉で印象深かったのは「今あるものをそのまま受け入れてはいけない」ということ。
- ・木島氏のデザインは形態から構造へと変わっていった。「カッコいい」は行き詰まり、デザインは結

果だと考えるようになったようだ。

その土地の文化をつくっていくような建築であれば、建築は地場産業たりえるのではないか。

当初ゼミは、木島論とは関係ない内容で進めても良いという意向だったようだが、孤風院という場所がそうさせるはずもなく、木島論に花が咲いていた。

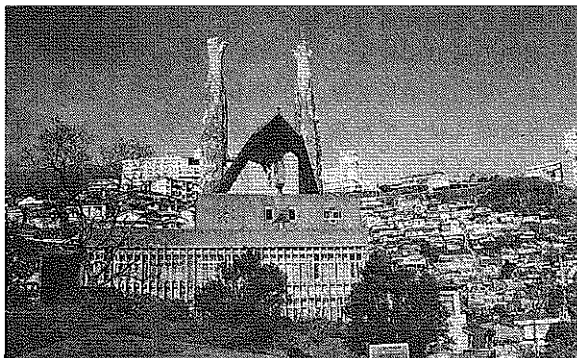
(伊藤 聡)

聖人達の約束の地

～二十六聖人記念館のフェニックス・モザイク～

表紙の写真は長崎市西坂にある、日本二十六聖人記念館の壁のフェニックス・モザイクである。我々の世代(昭和40年代生まれ)の北部九州出身の人なら、小学校の修学旅行で必ず立ち寄るのがこの二十六聖人の記念館であった(今でもそうと思う)。有名な二十六聖人の像の中の小さな像、わずか12歳で処刑された聖ルドビコの像などを見ると、死をもおそれないクリスチャンの信心の堅さに、子供心ながら感慨にふけたものである。

日本二十六聖人記念館は、1596年(慶長元年)に殉教した二十六聖人の一人フェリペ・デ・ヘシス(メキシコ最初の聖者、日本へは乗っていた船の不期の遭難で土佐に流れ着いたことによる)の列聖100年を記念して建設された。フェリペを含む二十六人の切支丹の処刑の命を下した秀吉は、九州のキリシタン大名の実力と、信者の死をおそれぬ結束におそれをなし、極端な妄想症に陥っていたといわれる。九州の中で最も中央政権から離れていた長崎は当時、信仰心の強い信者が極めて多く、今でも五島などに行くと、十字架を下げて農作業をしている「隠れキリ



日本二十六聖人記念館全景

シタンの末裔」といった老人をみかける。秀吉が、京都から二十六人の信者を、裸足で長崎に送りつけたのは、長崎の信仰熱に対する見せしめだったのだろうか。

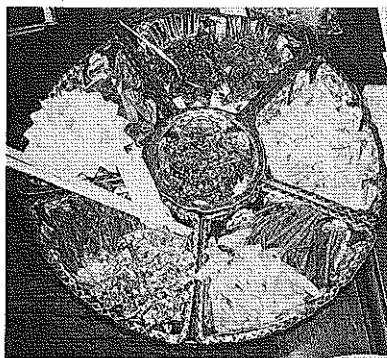
聖人記念館のフェニックス・モザイクは東壁「望郷」(hope)、西壁「信徒」(faith) から成っている。ガウディのスタイルで今井兼次氏の設計により1961年に創られており、近くで見ると、無数の茶碗が壁に散りばめられている。この茶碗は、すなわち二十六人の殉教者の京都～長崎の行程に沿った各地点における茶碗、つまり、旅路で食事をとった聖人達の軌跡をイメージしたものといわれる。黄や、オレンジ、ライトブルーなど暖色に満ちた色の艶やかな東西の壁は、この地で殉教した聖人達の輝かしい約束の地でもある。

私が写真を撮りに行ったのは、7月の暑い盛りであったが、じっと見ていると、何かじわじわと人の魂が壁を抜け出して滲みでてくるような気がした。

二十六聖人について詳しく知りたいと思われる方は当記念館においてある「長崎の道～日本26聖人」(結城了悟著)を手に入れられたい。(尾崎 正利)

食場日誌

- 7月×日 露天風呂視察のおり、美方町で宿泊した中佐屋旅館では、テーブル中央に本日のメインの料理として置かれていた鯛の生きづくりには目もくれなかった。そしてサブデッシュである山菜料理や鮎、やまめは瞬く間になくなってしまった。(や)



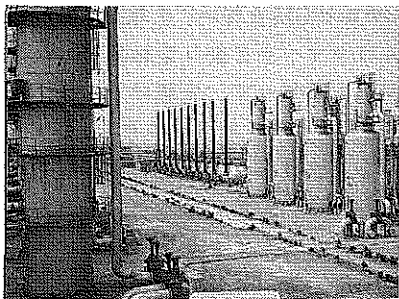
水菜、ふきのとう、はちく、山椒の実、たらの芽、山ぶき、うど… たくさんの山菜に大満足

- 7月×日 我が社の勉強会後のつまみとして、福岡空港裏の〇〇〇ディカウントストアで仕入れた「水戸納豆」は4つで128円という破格の値段でありながら、納豆のくさみを保った美味しいものであった。また、ハム、焼き肉も1kg程度で約500～600円と安く、味もそれほど悪くなかった。食料品の価格破壊は確実に進んでいることを感じた一日であった。(や)
- 7月×日 兵庫県は浜坂町の「海の祭典」に昼頃到着し、しかたなく食べた屋台の焼きそばは、最悪のものであった。これは業務用お湯かけ焼きそばであり、注文するとアルバイト風のおねえちゃんがバケツに入ったお湯の中から30cm×50cm程

度のビニール袋に入った焼きそば袋をおもむろに引っぱりあげ、鉄板に格好だけのせて、あとは発泡スチロールの皿についでくれるだけのものであった。もう二度と、こういうところで焼きそばは食べないと誓った一日であった。(や)

中国の経済開発区を見に行った

去る7/24～8/1にかけて、東アジア学会の中国開発地域視察に参加しました。視察のルートは天津、北京の2つの直轄地と青島市、東営市の山東省の2都市でした。現在中国では、各省ごとに経済開発区を設け、外国資本の導入に積極的に取り組んでいます。特に黄河河口デルタ地帯では、勝利(シャンリー)油田の開発と塩の生産(広大な塩田による)等で産業立地のポテンシャルも高く、市当局の企業誘致の熱の入れようも相当なものです。我々は黄河のデカさ、大地の広さ、中国料理のウマさに脱帽したわけで、よくいわれている「21世紀は中国の時代だ」ということに少なからず頷きました。この視察についての詳しい報告は次回で行います。(お)



東営市の開発区内の石油化学工場
勝利油田の石油はここで精製される

所内勉強会～地方財政の仕組みについて

講師：福岡県地方課 田中氏

当社では月一回か隔月程度で、所員の知識向上を目的に勉強会を行っています。これは主に都市計画やまちづくりに関する事業や制度の仕組みと実際(現場)、最近の流れ等について、それぞれに通じた講師を立てて勉強するもので、これまでに、都市再開発事業、住環境整備事業、北部九州学術研究都市構想、都市計画、特定優良賃貸住宅(特優賃)等の勉強会が行われてきました。

講師は所員が行う場合と、外部の人をお願いする場合があります。特優賃など、これからはじまる制度については、勉強会というより討論会の様になってしまうこともあります。

今回の「地方財政の仕組み」については、福岡県地方課の田中氏に講師をお願いし、仕組みから最近の流れまで色々なお話を伺いました。大きくは、地方自治体の収入と支出、地方交付税制度の仕組みと内容、その問題点等について解説して頂きました。

これらの話を聞いて、一応の理解には達したのですが、中央(国)と地方(県、市町村)の金銭のやりとりは実に複雑なんだなあとというのが感想です。

資料まで揃えて頂いての勉強会で、話はとても分かりやすく、興味深いものでした。最後になりましたがこの場を借りてお礼申し上げます。

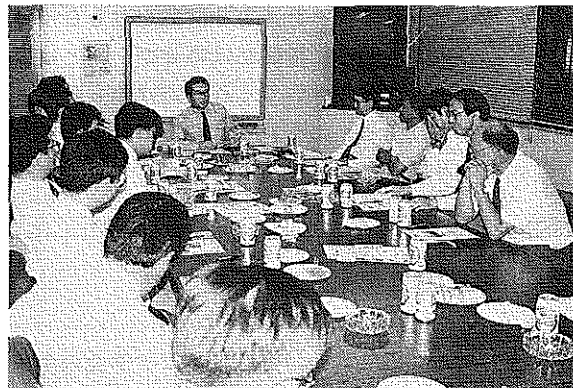
(北村 茂樹)

地域ゼミ～宗像ユリックスについて

講師：小田重和氏

7月21日に、第32回地域ゼミが行われました。今回は「宗像ユリックスは地域のシンボルを超えたか」と題し、宗像ユリックス建設の経緯と宗像の都市戦略の試みについて、現在は宗像市健康福祉部にお勤めである小田重和氏に講演していただきました。その内容を一部ご紹介いたします。

- ・宗像ユリックスは市民のニーズにより生まれたものである。昭和56年マスタープラン改定時の市民アンケート調査で、町にとって必要なものとして総合病院に次いで挙げられたのが文化施設だった。
- ・宗像市は、昭和30年代後半から新日鉄ブームの波にのり、北九州市のベットタウンとして栄えた（しかし、昭和40～50年には福岡都市圏の拡大に伴い、福岡市寄りに位置づけられることとなる）。このため市は、その間ずっとインフラの整備に追われることとなったが、その一方で、文化施設建設のための資金を着実に貯蓄していった。昭和55年頃になると、ようやくインフラの整備も完了のめどがたち、市としても本格的に地域のシンボルとなる文化施設づくりをと考えはじめた。
- ・当初は土地は切り売りで、施設は市内各所に点在させる予定だったが、宗像市内に市街化調整区域30haの土地が残っているのを知り、急きょ、総合市民センターという姿で展開していくこととなった。ここで、市としてのユニーク性を意識しはじめた。
- ・宗像ユリックスは、市が市民に対してどんなサービスができるか、そして、宗像市＝宗像大社とい



ここだけの話も聞けた地域ゼミ

- うイメージ（しかもこれは間違っていて実際は玄海町にある）をどれだけ変えられるか、ということテーマとして昭和63年7月にオープンした。
- ・宗像ユリックスは、本館に図書館、プラネタリウム、アクアドームに温水プール、屋外にゆ～ゆ～プール、芝生公園等、約20の施設をもち、これと車社会を睨んでつくられた大駐車場（収容台数約1,300台）からなる。これは、北九州市からも福岡市からも郊外にある宗像という土地だからこそできることである。
- ・宣伝には新聞、テレビCMを使い、広報誌も発行した。オリジナルロゴマークを創り愛称募集も試みた。とにかく何事も欲張って、先駆けてやった。
- ・現在は文化サークルの部門も軌道にのり、200講座がひらかれている。施設も、文化サークルも基本的には宗像市民へのサービスであるが、市民である、ないの区別は一切なく、より多くの人に利用して欲しいと思っている（それでも、宗像ユリックスって何かきいたことある、という声だけで十分幸せを感じるとのこと）。

ビデオの上映とあわせて2時間程の講演でしたが、私を含めて参加者を、今度いつてみようかしらという気持ちにさせて下さいました。

宗像ユリックスへは、国道3号を福岡市内から北九州方面へ走らせる、またはJR東郷駅からバスを利用するのどちらかになります。

ちなみに、宗像ユリックスのユリックスは、市の花・百合（ユリ）と、市の木・楠（クス）から名付けられたとのことでした。（伊藤 加奈）

筑後川の源流を訪ねて

7月16日、“筑紫のみずがめの会”の方に、日田及びその周辺を案内していただきました。その日はうだるような暑さで、今年の最高気温を記録したことは後になって聞かされました。

この会は筑後川の上流に緑のダム建設を目的としたボランティア運動を行っており、今度その活動の一環として筑後川の源流の水を会員に対し、実費のみでの配送を始められるとのことでした。今回はその話を伺うことと、9月に糸乗が日田で講演をするためその下見を兼ねたものでした。

まずは腹ごしらえ、上津江村の「小竹庵」という民宿で昼食をということになりました。ここは、昭和初期の旧家をリニューアルしたもので、大きな大黒柱が印象的でした。地元で採れた山菜等のでんぶら、やまめの味噌焼き、大きな地胡瓜の浅漬などが（勿論冷えたビールも）出ました。料理も雰囲気もなかなかなのですが、ここはこれといった観光の目玉もないらしく、常連客がほとんどのこと、そこで、お客さんを増やすために薬草風呂をつくってはどうか

だろうかという話になりました。それというのもここに来る前、ちょうど地元のJAの方に農地を見せていただいたばかりだったのです。その10haほどの農地は地力の弱い山林を切り開いてつくったもので、石がごろごろ転がっており、農地として活用するのは難しいように見えました。地元の若い職員の方も困っている様子でしたので、そこに薬草を植え薬草風呂に利用したらどうかということなのです。「小竹庵」の横は崖になっており、露天風呂を創るには格好の場所のようでした。

その後、南小国町にある筑後川の源流を見せていただきました。筑後川の源流となる所はいくつかありますが、南小国町の源流は、遊歩道らしき道を下ったところにあり、何故か、鉄条網が張り巡らされてありました。その柵をくぐり、雑木林のなかをかき分け土手を下ると、「筑後川の源流」とかいてある杭が一本見えてきました。ここは木々に囲まれ、鬱蒼と生い茂った木の間から西日が差し込み、それは一服の清涼剤という感じ。久しぶりに自然に触れた一日でした。（金川 薫）



24年ぶりの東京

昭和44年10月1日水曜日、私は東京都墨田区太平で産声を上げた。そして平成6年7月5日、実に24年ぶりに東京に帰ることになった。これは私の東京見聞録である。

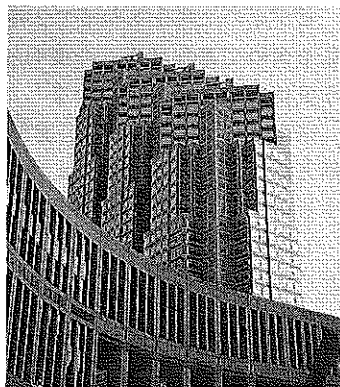
先月、東京で行われた都市計画に関する講習会に私が行った時のことである。初めてに近いほどの久しぶりの東京行きに私の心は躍った。

講演会が終わったその夜、大学時代の友達と卒業以来久しぶりに会い、大学時代の思い出を語り合い、酒を酌み交わした。ところは新宿歌舞伎町。平日というのに、ここは天神の親不孝通りの金曜日以上の人出と熱気ですごかった（ギャルの呼び込みには無視もできず、ついていて行きそうになってしまう）。帰りに超高層ビル群を一目見たいと申し出て、歩いて約10分。見えた。目の前にそびえ立つそのビル群は、ダイヤモンドを散りばめたような窓明かりが夜空を覆い尽くしているようだった。

明るく日、講習会が午後3時に終了し、それから靖国神社を訪問した。提灯が沿道に延々と飾ってあった。夜がきれいだったろうなと思いつつ次の目的地を考えたが、昨夜のあの超高層ビル群が忘れられずに新宿の方へと向かっていった。夜と昼とは違った世界に見えた。昨日見たのは幻想的な空間であったのが、今見るとその姿はヒューマンスケールを全く無視したものであった。人間の技術の素晴らしいよりも恐怖感の方が大きかった。

丹波健三設計の東京都庁を見に行ったら。実物を見たのは初めてであるが、クリスタルっぽい造形がすごく、デザイン的にはよく分からないが一体的な景観が素晴らしいと思った。

都庁は、2つのクリスタル形の庁舎と寸胴の都議会議事堂の3つで構成されている。第一本庁舎が高く高さ243m、48階建てである。ちなみに北九州市小倉北区にある九州一のつぼビル「リーガロイヤルホテル小倉」が高さ132mなのだから、どれだけのものか想像できよう。そしてこの都庁のメインでもある



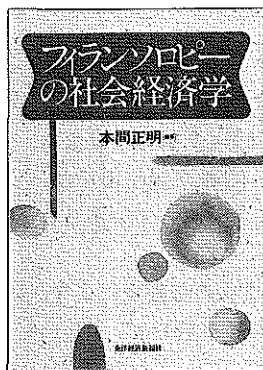
見上げると
首が痛くなりそう

45階の展望室であるが、そこまで上がるエレベーターも素晴らしい。何と1分足らずで45階を上りきってしまう。しかも、エレベーター特有の気圧の変化を全然感じさせないものとなっている。展望室からは、東京が360度一望できる空間となっている。東京タワー、皇居、東京ドーム、というように眺めは素晴らしい。しかしその日は、富士山を拝むことはできなかった。中央部には喫茶コーナーがあり、ゆっくりくつろげるスペースとなっている。

都庁を出て新宿駅に向かう途中に、ホームレスの人々を目の当たりにした。近代的な超高層ビルの下にこのような生活をしている人々がいる。新宿という街のアイデンティティがつかめぬまま、この街を後にした。

私にとって24年ぶりの東京はどことなく懐かしい感じがして、見るもの全てに愛着が感じられるようで、何となく不思議な2日間だった。

(宮原 真一)



フィランソロピーの
社会経済学

本間正明 編著
(東洋経済新報社)

本書は、日本のフィランソロピー（社会のための寄付活動やボランティア活動）の現状を社会システムの中でどのように位置づけられ、国際的水準とどのくらいの格差があるのかということを学術的な側面からアプローチしたものである。

本書は、「NPO研究フォーラム」の活動の一環として発刊され、東南アジアや西欧の非営利セクターの実態の紹介、日本における非営利セクターの実態などの指摘、非営利セクター設立のための制度改革についての提案がなされている。

〈非営利、非政府セクターとは〉

非営利、非政府セクターとは、政府活動の下請けではなく、「自発的な労働（ボランティア）」が、活動のインセンティブであることを指摘している。つまり、資金供給源となるのは「税金」ではなく、「自発的に（ボランティア）」供給された「寄付」であり「フィランソロピー」であり、人々の「志」によって成り立つものであることが強調されている。この「志」を生かす、「自発性」を促すシステムの不足が日本の根本的な問題としてあげられている。

〈営利法人と公益法人〉

日本では、営利法人に対し、非営利法人ではなく

公益法人と明記され、営利も公益も目的としないものは法人として認められない。そのため、この中間団体に対する法人格取得の道が開ざれていることが、非営利セクター制度の根本的問題であると指摘し、さらには、設立許可が主務官庁により行われていることで、市民レベルの草の根団体の多くは任意団体のまま活動を余儀なくされていることを指摘している。

〈制度改革への提言〉

現行の制度上の問題点を踏まえ、本書は、公益法人制度の見直しとして、主務官庁の一元化、法人格と税制上の優遇措置の切り離し、さらに、税制上優遇されている公益法人の課税庁への報告により公益事業か収益事業かを明らかにすることが必要であり、非営利団体の活動のチェックも強化するなど、本来の公益事業活動を明確にすることが必要としている。

また、ボランティアや寄付の少なさに対し、寄付金控除の問題点、特定公益増進法人の拡大、認定制度の改革、同時に現行の年末調整、源泉徴収の改革についても言及している。

〈非営利セクターの認知度〉

主務官庁による公益法人の事業活動の情報公開をもっと進めることにより、非営利セクターの活動を活発化し、国民的合意の形成、さらには制度の改革を進めることが今求められており、非営利セクター自身の情報発信機能の向上を必要としている。

本書は、公益活動における現行の制度の問題点の指摘だけでなく、制度の見直し、提案まで踏み込んだものであり、公益活動に興味のある人にとっては全容を知る上で役に立つ解説書である。

(山辺 真一)

お知らせ

第33回 地域ゼミのご案内

「農産物直販所プームの先端を行く
佐賀県七山村一鳴神ノ庄の事業化
経緯と取り組みについて」

講師：岡本 光氏（七山村 産業課係長）

【日時】 9月22日（木曜日）

18：30～20：30

【場所】 ㈱九州地域計画研究所

7階会議室

【参加費】 1,000円

【連絡先】 TEL. 092-731-7671

FAX. 092-731-7673

（富重・歌丸）

今回は、農産物直販所プームの火付役となった七山村鳴神ノ庄のいきさつと取り組みについてお話ししていただきます。

参加を希望される方は、上記宛にTELあるいはFAXでご連絡下さい。

会議室のスペースの都合上、30人までとさせていただきますので、お早めにお申し込みください。

【編集後記】

☞今年には100%冷夏が続くと断言した人もいましたが、天気と女心（あるいは男心）はあてにならないようです。よかネット11号が届く頃には、いくぶん涼しくなっており、雨も降っていることを祈る次第です。

☞よかネット編集も編集係2人の頑張りにより、前号までの“モタモタ”から“ややモタ”ぐらいになったのではないかと自画自賛しております。

☞今回のよかネットは、所内で定期的に行っている「地域ゼミ」、「所内勉強会」、「視察・講習会・報告」などの近況ものを多く掲載しており、所内の日常的な活動や近況を少し想像していただければと思います。

（や）

よかネット NO.11 1994.9

（編集・発行）

㈱九州地域計画研究所

〒810 福岡市中央区天神1-15-1 日之出ビル6F

TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

（ネットワーク会社）

㈱地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-942-5732

名古屋事務所

TEL 052-962-1224

東京事務所

TEL 03-3226-9130